

キリストの愛が  
わたしたちを駆り立てている

マルコによる福音書 4 : 35 - 41  
コリントの信徒への手紙Ⅱ 5 : 14 - 21



司祭 ヨハネ 井田 泉

2024年6月23日  
聖霊降臨後第5主日  
京都聖三一教会にて

今日 6 月 23 日は、沖縄慰霊の日です。日本聖公会からの「2024年 沖縄週間／沖縄の旅」の案内の終わりのほうには次のように記されています。

「太平洋戦争では県民の 4 人にひとりが犠牲となり、現在でも『国土面積の約 0.6%しかない沖縄県内に、全国の約 70.3%の在日米軍専用施設・区域が依然として集中しています。都市計画は基地によって制限され、軍用機の騒音が会話を遮ります』(防衛省の web サイト)。この世に遣わされた者として、この現実をどのようにとらえ、主の光を示すことができるでしょうか」

すでに退職されましたが沖縄教区に石原絹子司祭という方がいらっしゃいます。わたしの親しい方ですが、悲惨な沖縄戦を直接に経験された方です。お父さんは戦場に駆り出されて亡くなりました。7 歳のとき、米軍の爆撃の中をお母さんと兄妹たちと一緒に逃げまどわれた。その中でお母さんを、兄を亡くされ、さらに背に負ぶっていた 1 歳の妹を、手を引いていた 3 歳の妹を亡くされました。ただひとり生き残られた。その体験から、切実に命と平和の尊さを訴え続けておられます。わたしたちもその願いと祈りに連なりたいと思います。

今日は使徒書、パウロのコリントの信徒への手紙Ⅱの 1 節に耳を傾けましょう。パウロはご存じのように、元はキリスト教を迫害していた人で、それが復活のイエスに出会って回心し、熱

心なキリスト教伝道者になった人です。遠く旅をしていくつもの教会を創立しました。コリント教会もその一つです。

今日の使徒書はこう始まっていました。

**「なぜなら、キリストの愛がわたしたちを駆り立てているからです。」コリントⅡ 5:14**

「なぜなら」というのは、直前にパウロが言ったことの原因を説明しているのですが、そこは今日の日課から省かれていますのでわかりにくい。その直前でパウロはこう言っています。

**「わたしたちが正気でないとするなら、それは神のためであった……」5:13**

自分が正気を失うようなことがあったとパウロは言うのです。それは神のためであった。「正気を失う」とはこういうことでしょうか。神の愛が迫ってきて、それが自分の中で燃え上がる。神への熱心が高じて、普通の自分なら言うはずのないことを言い、するはずのないことまでしてしまう。できるはずのないことが実現してしまう。そういう人物であったからこそ、パウロは命がけで伝道して、いくつもの教会を設立することができたに違いありません。

**「キリストの愛がわたしたちを駆り立てている。」**

**コリントⅡ 5:14**

わたしたちの信仰生活で、何を大切にすべきでしょうか。キ

リストの愛を心に宿すことです。イエス・キリストがわたしたちを愛しておられるその愛を知り、信じ、それに動かされて生きることです。ここに何度でも帰りましょう。

ここで今日の福音書を思い出してみることになります。

「その日の夕方になって、イエスは、『向こう岸に渡ろう』と弟子たちに言われた。そこで、弟子たちは群衆を後に残し、イエスを舟に乗せたまま漕ぎ出した。……激しい突風が起こり、舟は波をかぶって、水浸しになるほどであった。しかし、イエスはとも艫の方で枕をして眠っておられた。」マルコ 4:35-38  
暗い夜、湖は大荒れで舟の中の弟子たちは恐怖に陥りました。「弟子たちはイエスを起こして、『先生、わたしたちがおぼれてもかまわないのですか』と言った。イエスは起き上がって、風を叱り、湖に、『黙れ。静まれ』と言われた。すると、風はやみ、すっかり凧になった。イエスは言われた。『なぜ怖がるのか。まだ信じないのか。』弟子たちは非常に恐れて、『いたい、この方はどなたなのだろう。風や湖さえも従うではないか』と互いに言った。」マルコ 4:38-41

この話から二つの箇所に注意を向けてみましょう。

まず一つは弟子たちのイエスに対する叫びです。

「先生、わたしたちがおぼれてもかまわないのですか」 4:38  
人生の困難に遭って、わたしたちもイエスに向かって叫びた

い。叫んでよい。叫ぶべきなのです。「主よ、わたしたちがおぼれてもかまわないのですか」「わたしたちが死んでも、滅びてもあなたはかまわれないのか」。

もう一つは、最後に弟子たちがお互いに言った言葉。

**「いったい、この方はどなたなのだろう」4:41**

このイエスは何ものなのか。わたしたちにとってどういう存在なのか。弟子たちが深く抱いたこの疑問。もっとはっきりイエスを知りたいという願い。そのような疑問と願いを持つことは不信仰なことではなく、大切なことです。

ところでこの二つの問い。

**「先生、わたしたちがおぼれてもかまわないのですか」4:38**

**「いったい、この方はどなたなのだろう」。4:41**

この問いに対して、自らの苦難と救いの経験をとおして、徹底的に答えてくれたのがパウロです。

「先生、わたしたちがおぼれてもかまわないのですか」と叫んだ弟子たちは、あの時はイエスに嵐を静めてもらって助かった。わたしたちにもそういうことがあれば、それを大切にしたい。けれどもこの弟子たちの叫びは、もっと広い意味で、わたしたち全員の叫びであり、さらに全人類の呻きです。

わたしたちは結局、滅びてしまうのか。大小の幸不幸を味わって、結局は死んで無に帰して、だれの記憶からも消え去って

しまうのか。パウロは断固として言います。そうではない！わたしたちの救い主イエス・キリストは、わたしたちが滅びるのを許されない。わたしたちに対する愛のゆえに、キリストはわたしたちの滅びと死をご自分に引き受けて死なれた。そして復活してわたしたちに新しい命を用意された。イエス・キリストの十字架と復活がわたしたちの救いだとパウロは言うのです。

パウロの言葉をもう一度聞きましょう。

**「なぜなら、キリストの愛がわたしたちを駆り立てているからです。わたしたちはこう考えます。すなわち、一人の方がすべての人のために死んでくださった以上、すべての人も死んだことになります。」** コリントⅡ 5:14

「こう考えます」というのは、ちょっと考えてこう思った、という程度の軽い言葉ではありません。自分自身が苦しみ求めて、そして神さまから示されて、もうこれ以外にないと分かった結論ということです。

**「すなわち、一人の方がすべての人のために死んでくださった以上、すべての人も死んだことになります。」**

これはわかりにくい、納得しにくい。しかしパウロを突き動かすキリストの愛が、こう確信させ、こう言わせるのです。謎のような理解できない言葉。しかしその中に福音の命がある。だれにでもすぐに理解され、受け入れられるようなものではありません。聖霊によってはじめて理解しうる言葉です。

一人の方、つまりイエス・キリストが十字架で死なれたのは、すべての人のため、すべての人の救いのためだ、というのです。穏やかな死も絶望の死も、どの人のどのような死も、イエスの死の中に招き入れられる。イエス・キリストは全人類の救い主として、十字架の上で際限なくご自分の手を広げて、地の隅々まで、地下の奥底まで手を広げて、全ての人の死をご自分の死の中に受け入れ引き受けてしまわれた。イエス・キリストの死と切り離されたわたしたちの死というのは、もはやあり得ない。

これはわたしたちの生涯の終わる時というのではなく、実はわたしたちが生きている間に、すでに起こっている。

正気を失って言うような言葉ですが、「イエスが十字架に死なれたとき、わたしたちもその十字架に死んだ」——これは 40 年以上も前に、わたしがある説教集で読んだ言葉です。その時はよく分からなかった。しかし衝撃を受けました。そして年月が経つうちに、それ以外にはないと思うようになりました。

わたしたちはキリストとともに死んで、キリストとともに生きる。キリストの死が復活に直結しているように、わたしたちの死も復活に直結しています。キリストの復活のゆえに、わたしたちの中に、新しい人が始まっています。キリストの愛を注がれて、生かされ清められたわたし、祝福されたわたし、キリ

ストをわが内に宿したわたし、キリストの愛に応答して生きる新しい人が、わたしたちのうちに動きはじめています。

イエス・キリストの愛がわたしたちのすべてを、死も苦難も不安もまるごと包みます。そうしてわたしたちを新しく生かします。

このことを伝えたいと切に願ってパウロは語り、またいくつもの手紙を心を尽くして書いたのです。

祈ります。

神さま、かつてパウロを駆り立てたキリストの愛がわたしたちにも宿りますように。キリストが世界を、全人類を、またわたしたち一人ひとりを限りなく愛しておられることを、わたしたちがはっきり知ることができるように、聖霊を注いでください。キリストの愛に動かされて生きる新しい人をわたしたちうちに育ててください。主イエス・キリストによってお願いいたします。アーメン